

# 対話の中での感動詞の使用

## —図形説明課題における「あ」「え」「ん」の分析—

水上 悦雄  
情報通信研究機構けいはんな  
情報通信融合研究センター

井佐原 均  
情報通信研究機構けいはんな  
情報通信融合研究センター

### 1 はじめに

我々は日常会話で何気なく感動詞を使う。以下は対話データ中の例である<sup>\*1</sup>。

- (1) ア(.)わかりました
- (2) エ(.)それで終わり?
- (3) ン? (1.0) えー三つ目からお願いします

これらの例に見られるように、主に発話の冒頭に、そのときの心的情報処理過程を表示するような感動詞を発している。これらは極端に短いことばでありながら、多分に記号的である場合がある。例えば、田窪・金水(1997)によれば、「ア」は、発見・思い出しを表し、情報を新規に登録する際の標識であり、「エ」、「ン」<sup>\*2</sup>は、意外・驚きを表し、対話のために準備された知識ベースと矛盾したり関連性が低かったりするような情報を受け取った際の標識であるとされている。記号あるいは標識であるということは、それらが伝達の側面を担う語となり得ることを指すが、富樫(2005)は、感動詞の本質は、話し手の心的状態の変化なのであって、伝達の側面に関わる聞き手の存在を必ずしも要請しないと指摘している。その上で、—そこに聞き手が存在する場合には—、聞き手の解釈を介して、話し手の感情・心情が伝えられるという作業が行われるのであると述べている。

これらの考察を踏まえ、我々は、感動詞や間投詞と呼ばれるものが、話し手の心的過程の標識となり得るといふ考えの下、それらが実際の対話場面において、どのように現れるのか、分析し、対話処理技術への応用に向けて研究を進めている。感動詞は、細馬(2006)が指摘し

ているように、例えば話し手が聞き手を指向していなくても、対話場面においては、聞き手にとって無視できない情報となり得る。そのような伝達の側面は、特に対話参加者が共同作業をする場面において、強く指向され、参加者にとって利用可能なリソースになり得るように思われる。本稿では、従来、内省的方法で考察されることが多かった感動詞を、改めて実際の共同作業型対話データの中での用法を分析し、特に「ア」「エ」「ン」の用法とその差異について考察することを試みる。

### 2 方法

#### 2.1 対象データ

今回の分析の対象としたのは、情報通信研究機構で収録された、図形説明課題遂行中の対話である。この課題のデザインは、二人が別々の収録室に入って座り、説明者側のモニタに表示される図形を回答者にマイク・ヘッドフォンで対話をしながら、伝えると言うものであり、被験者らは、画面の指示に従い、説明者役を二回、回答者役をそれぞれ二回ずつ行う。収録は、相手が知人・友人の場合の知人状況と、初対面状況、相手の見えない非対面状況と、ガラス越しに相手が見える対面状況とに条件を分けて実施されたが、特に今回は、このうちの初対面かつ非対面状況下での6ペア×4課題=24課題分のデータを対象とした。また、各課題は、説明(説明者から回答者) 確認(回答者から説明者) 回答の順に進められたが、会話の指向性を明確化するため、説明フェーズのみを対象とした<sup>\*3</sup>その結果、対象データの時間総計は、50分20.8秒、6ペア平均で8分23.5秒、一課題あたり、2分5.9秒であった。

<sup>\*1</sup> 会話例中の(.)は、短いポーズを、括弧内の数値はポーズの秒数を、” : ”は長音を表す

<sup>\*2</sup> 田窪・金水(1997)では、「ん」や「うん」を直接挙げていないが、「ふん(上昇イントネーション)」が近い用法であると判断した。

<sup>\*3</sup> ただし、説明中であっても、わからない点は聞き返しても構わないと教示した。

## 2.2 ラベリング

田窪・金水(1997)は、感動詞・応答詞の類を、入出力系と言い淀み系に便宜的に分類している。我々が感動詞としてラベリングしたものは、この入出力系に分類されているもののうち、「意外・驚き」「発見・思い出し」にあたる\*4。具体的には、「あ(っ)」「え(っ)」「あれ?」「ん?」などである。ラベリングは、二者で別々に行い、一致しなかったものに関しては相談の上判断した。

## 2.3 分析手法

感動詞の使用法を詳細に分析するため、感動詞の先行発話の発話末境界(オーバーラップして発話されている場合は、重なりの対象の発話末)が、どのような発話境界であるのか、高梨ほか(2004)を参考に分類した。それらは主に、絶対(主に文末)・強(「けど」などの並列節)・弱境界(条件節、「て」節など)・その他の境界(体言、助詞、接続詞、談話標識、フィラーなど)として分類された。これらは、先行発話の文末らしさの程度を表していると考えられ、その感動詞が話者交替の観点から、対話の中のどのような位置に出現しやすいのかを分析することができる。感動詞は、必ずしも文末のような移行適切場(Sacks et al., 1974)と呼ばれる箇所において、発せられるわけではなく、発話末境界の種類に依存しない場合がある。そのような場合が許されているのであれば、なぜ許されるのかも合わせて考察する。また、感動詞に続く発話についても考慮し、その感動詞が話し手によって、どのような心的処理過程で使用されたのかを前後の関係から分析した。特に、「ア」に関しては、データ中、「はい」の前に付加されることが多く、言語形式が「はい」であったものを抽出し、「ア」との関係进行分析した。

## 3 結果および考察

### 3.1 データ中の感動詞の数

表1に、対象データ中の感動詞とラベリングされたものの総計とその内訳を示す。「ア」が全体の8割近くを占め、「エ」や「ン」に比べ圧倒的に多くみられた。このうちの多くが、3.2で述べるように、「アはい」というふうに、応答や了承を示す「はい」の前に付加されたものである。また、回答者側が全体の7割を占める割合で

\*4 田窪・金水(1997)では、この他、「応答」「気付けせ・思い出させ」「評価中」「迷い」「嘆息」を入出力系として挙げているが、これらについては、別稿で整理し、本稿では対象としない。

感動詞を発している。この回答者側と説明者側の感動詞の使用に質的差異があるかどうかは、前述のように回答者が聞き返してもよいことになっているので、一概に切り分けることはできない。さらに詳細な分析を必要とする。以下の項では、頻度の大きい「ア」および「エ」「ン」についてそれぞれ分析をする。

表1 感動詞の数

種類	回答者側	説明者側	計
ア(ッ)	69	28	97
エ(ッ)	7	5	12
ア:	6	0	6
ン	4	2	6
アレ	0	1	1
へ	1	0	1
ウ(ッ)	1	0	1
計	88	36	124

### 3.2 「ア」の出現位置

最も頻度の大きかった「ア」について、先行発話末のタイプとその話者、および「ア」に続く発話について、特に「はい」が続くか、それ以外か、「ア」単独であったかどうかを表したのが、表2である。表中、合図とあるのは、課題の冒頭で、「アはじめます」のように、開始の合図として導入された場合を指す。全94例中の58例が先行発話末が絶対境界、例えば、

(4) E: あとは特にはないです

A: アはい(.)わかりました

(5) A: 立体になってますか?

E: ア(.)平面です

のような例である\*5。このような場合のほとんどが、いわゆる発話交換(Sinclair & Coulthard, 1975)における「開始」に対する「応答」にあたる発話頭に付加される場合である。しかしながら、同様の構造的な位置、つま

表2 「ア」の用法

先行境界	先行話者		後続発話			計
	自分	相手	はい	単独	その他	
絶対	4	54	34	2	22	58
強	0	7	5	0	2	7
弱	0	2	0	1	1	2
はい	1	7	2	0	6	8
フィラー	2	1	0	1	2	3
合図	-	-	0	0	3	3
その他	6	10	10	0	6	16
計	13	81	51	4	42	97

\*5 A:は回答者の発話、E:は説明者の発話を指す

り応答の発話頭に必ずしも感動詞「ア」が付く必要はない。しかし、上記の二例での、「ア」の導入は非常に自然であるように感じる。このことを整理するために、応答や承認、あいづちとして使われる「はい」に「ア」が付加する場合を考察する。

表3 「はい」と「アはい」

	はい	アはい	合計
回答者	382	47	429
説明者	112	3	115
合計	493	51	544

表3は、対話中に現れた「はい」の総数と\*6。その前に「ア」が付加したものの例数を示す。これを見ると、「はい」に「ア」が付加するのは、ほぼ回答者側である。ただし説明者側は、説明フェーズであるがゆえに、「はい」そのものの例数が少なく、これらは下の例のような回答者の応答に対する認定(acknowledging)や、

(6) E: 少し中心寄り [なんですね

A: [アはいはいはいはい

E: はい

回答者の確認や聞き返し発話中のあいづちがほとんどであり、応答にあたるものは、それほど多くはなかった。その中でも説明者側の応答の「はい」に「ア」が付加したものは以下の3例であった。

(7) A: それは逆さまってことです [か?

E: [アはい

(8) A: 入るとい漢字の右下が二またに分かれ [ている

E: [アはいそうです

(9) A: 三つ三つめがまっすぐってことです [か?

E: [アはい

これらは、回答者からの確認のための発言や質問を承認する形式であるという共通点があるが、そのような交換のタイプで、「アはい」でなく「はい」が使われる場合は他にもたくさんある。しかし、実はこの3例はいずれも、説明者が説明時に使用しなかった発話デザインの仕方、回答者が確認してきた場面である。例(7)は、説明者が「逆を向いている」と表現した後、回答者側が「逆

さま」という表現で確認しており、例(8)は、「二つにわかれている」との表現に対し、「二また」という表現を使い、例(9)は、説明者が「一つ目は～、次に～、次に～」と表現してきたのに対し、回答者は「三つめ」という表現で問い返している。これらの「ア」は、自分の認識や発話表現と相手発話表現の差異をマークし、さらに「はい」でそれを同じことであると認定していると言える。

ただし、応答にあたる「はい」にしか「ア」が付加し得ないのではない。回答者側の429例の「はい」のうち「アはい」54例全てが応答というわけではなく、あいづちと考えられるものに「ア」が付加する例も数例観察されている。以下にその例を挙げる。

(10) E: で合計四つなんですけど [二つめの

A: [アはい

E: 斜め(0.4)にある図形だけ [が

[アはい

E: 右に少し傾いてるんですね

この例では、一つ目の「ア」は、説明者が四つの四角形が組み合わさった図形を一つ一つ説明し、四つ全てをとりあえず説明した強境界であり、二回目の「ア」は、さらにその四つの中の二つ目のみが、傾いているということ強調するために、「だけ」という限定・強調の助詞を用いた箇所、聞き手が「アはい」と発話している。これらの特徴は、3.3で見えるように、承認の表示という概念で整理するとよいのかもしれない。

### 3.3 「ア: はいはいはい」

「ア」と似た感動詞として、「アア」もしくは「ア:」のように、「ア」を伸ばした形で発せられる場合がある。これらは、「ア: はいはいはい」のように、「はい」をいくつも重ねる形で、強い納得を表示している。実は、我々は今回感動詞をラベリングする際に、説明者の説明に対し、「あ: あ: あ: あ:」などの「あ:」の連続をいくつも観察した。これらも感動詞と言って差し支えないものであると思うが、「はいはいはいはい」などの応答との差異化が困難なため、今回はラベルの対象から外した。しかし、これらの例に見られるように、「ア:」は、聞き手に対して、自分の理解や承認を表示するためにあえて用いられるタイプの感動詞であると考えられる。つまり、富樫(2005)が指摘しているように、本来「ア」は話し手の状態の変化点の現れであるが、場合に応じて、聞き手を強く指向する使い方がなされることがあり、その最たるものが、この「ア:」であると考えられる。

\*6 「はいはい」や「はいはいはい」は、それぞれ連続したものを一つと数えている。ただし、後述するように「はい」と「はいはい」では話し手の指向に差があると考えられる。

上記のことを踏まえると、「ア」は話し手の処理上の変化点、特に、何らかの判断をし得るような情報のまとまりを承認した時点の表示であると考えることができる。ゆえに、共同作業の過程で「ア」が果たす機能は、「それを今承認した」ことを相手に表示する意味を担うと捉えることができる。

(11) E: えっと (0.8) もう説明していいですか？

(1.9)

E: アレ？

(0.9)

A: ア (.) はい

E: はい

この例の「アはい」は、冒頭の E の質問と、ポーズ後に E が「アレ？」を発した意図の両方を承認し、E の質問が実験者ではなく、自分に対してなされていることを「今」理解していたことの表示としてデザインされている。逆に、「ア」が「今」の表示であるからこそ、例 (6) のように、移行適切場でなくとも発することが許される対話上の装置として働くのではないだろうか。

### 3.4 エの用法

対象データ中の「エ」は 12 例であり、例 (2) のように、意外や驚きを表すものも確かに見られたが、予期しない質問や発言に対してだけ、用いられるのではない。

(12) E: はいでその次：の正方形 [が

A: [その次というのは  
右でエ (.) 四つってどういうふう  
に並んでるんですか：？

この例は、相手の発言を受けて理解しようとした過程で、確認したい事柄が生じ、確認質問をするための導入標識として「エ」が使われていると考えられる。つまり、この「エ」によって、一旦自分のそれまでの処理を中断し、異なる処理過程に移っていることを表示している。逆に、この「エ」がなければ、先行発話との統語的なつながりが生じ、聞き手であるところの説明者の理解を妨げることになるであろう。この意味で「エ」はそれまでの知識ベースと矛盾したり関連性が低かったりするような情報の受信の標識に加え、話し手の処理対象の変化点の標識であると考えることができる。

### 3.5 ンの用法

対象データ中の「ン」は 6 例あり、意外や驚きと言うよりも、以下の例に見られるように、話し手のイメージの不確定さや、不可解さの立ち上がり、あるいは、それ

までの認識とのズレを発見したがその差異が明瞭でないことを表示していると考えられる。つまり、「ン」は、何らかの処理上の問題の発見（かつその問題が未解決のまま残っていること）の標識であると考えられる。

(13) E: えとね (0.9) 何て言えばいいんだろ (.) ン？

くっついてなあ (0.3) う：ん (1.0) 何て言えば  
いいんだろ (.) ン？

## 4 おわりに

感動詞は確かに話し手の処理過程、特に変化点が音声として現れたものであると考えることができる。しかし、田窪・金水 (1997) が考察しているように、その使用には制限があり、使われる文脈に依存して、使用可能な感動詞が選択される。逆に制限があるからこそ、聞き手にとって、感動詞は対話上のリソースとなり得、話し手の処理過程に対する理解を支援する役割を担う。

今回は、対象データが少なく、とりあげた「ア」「エ」「ン」についても限定的な議論しかできていない。さらに多くの対話データを詳細に分析し、感動詞の使用に現れる話し手の言語処理過程のモデル化、および対話において顕在化する側面について明らかにしていきたい。

## 参考文献

- 細馬宏通. (2006). 「あ」は相互行為的か？—会話の中で応答詞をとらえなおす—, 『人間同士の自然なコミュニケーションを支援する智能メディア技術』. 学術創成研究費研究. 招待講演.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, 696–735.
- Sinclair, J. M., & Coulthard, R. M. (1975). *Towards an analysis of discourse: The english used by teachers and pupils*. Oxford University Press.
- 高梨克也・内元清貴・丸山岳彦. (2004). 『日本語話し言葉コーパス』における節単位認定. (『日本語話し言葉コーパス』DVD-ROM, 国立国語研究所・情報通信研究機構)
- 田窪行則・金水敏. (1997). 応答詞・感動詞の談話的機能. 文法と音声 (pp. 257–279). くろしお出版.
- 富樫純一. (2005). 驚きを伝えるということ—感動詞「あっ」と「わっ」の分析を通じて—. 活動としての文と発話 (pp. 229–251). ひつじ書房.